

中世真宗で依用された『有善女物語』の構成とその思想 —「物語」に見る妻から夫への教化内容を中心に—

板敷真純（東洋大学）

要旨

『有善女物語』とは、中世真宗で念仏教化の際に教化僧が用いた物語である。近代の先行研究では、本書のように僧侶側が教化で用いる教化書を「談義本」と称して論じられてきた。「談義本」は中世真宗で非常に多く製作され、その内容は物語、經典の要約、備忘録など様々な形態が見られる。『有善女物語』の最古のものは、本願寺八代蓮如(1415-1499)の弟子である天然浄祐(1442-1506)が文明三年(1471)に書写したものが現存しており、この天然書写本は『有善女物語』の「異本」とされている。その後は「流布本」が室町期の中世真宗で拡がりをみせ、大正時代にも転写されている。

本書は、今生と来世二世の「夫婦の縁」を望む「有善女」が夫である「悪婆羅門」に念仏を勧める所から物語が始まる。その内容は、まず「有善女」は夫に念仏教化を行い、最終的には寺院の鐘の音を聞いたら念仏せよと勧める。「悪婆羅門」は妻の勧めに応じて鐘の音が聞こえる度に念仏を称えるものの、心に信心がなかったので地獄に堕ちてしまう。地獄に堕ちた「悪婆羅門」は、獄卒が持つ鉄のマタブリが釜に当たる音を聞き、図らずも念仏を称えて蘇生する。事情を聞いた「有善女」は大信心を固め見聞の道俗から「善知識」とされた、として物語は終わっている。

本書は妻の念仏誘因により夫が地獄から蘇生するという「物語」を下敷きに、大幅な脚色と加筆増補を施し成立されたものであることが明らかになっている。このような物語は古くは非濁(?-1063?)の『三宝感応要略録』『信婦言稱阿彌陀佛名感應』に見られる他、日本の平安期には『三宝感応要略録』の一部を下敷きにした往生伝・説話集の一部に同内容のものが見られる。また箕浦尚美氏は、本書の内容からそのような経緯で成立した平安期の戒珠偽撰『往生浄土伝』『阿輸沙國婆羅門信婦念佛往生浄土』を参照して本書が製作されたことを指摘している。

一方、先行研究において宮崎圓遵氏は、本書が女性を対象とした念仏教化の際に実際に使用されたものと極めて重要な指摘をしている。このことは、本書が日本仏教の中でも中世女性史研究において特に注目すべき貴重な史料であることを示唆している。しかしそれにも関わらず本書の作者や成立時期が不明であること、一部の内容に問題が見られることなどから、内容の詳細については深く論じられてこなかった。

注目すべきは、物語の「有善女」が説く浄土への往生観である。作中で「有善女」は「極楽に往生し夫婦のまま菩薩となる」ことを願う描写が確認出来る。文中に見られる「夫婦のまま菩薩となる」という「有善女」の往生観は、女性の身のままで往生することを意味しており特に注視すべき点である。

以上のことは、日本仏教における中世女性史の課題の究明という点で非常に重要な研究である。本発表では『有善女物語』の構成と思想内容、及び本書の意義について検討し論究を行う。これにより中世真宗の教化方法、中世女性の仏教理解の一側面を明らかにすることが出来ると考える。

キーワード：中世真宗史、『有善女物語』、「談義本」